

# 物と心の結び目

## 「亡 禅 尼」

東 野 光 生

うち続く梅雨の曇天の下、仕事部屋に活けた大輪のあじさいの花が美しい。そのみずみずしいぬけるような青さを眺めていると、季節が花をもたらすのではなく、花が季節をもたらす、それが本当のようにかんじられる。

あじさいをまえにして、ふと昨年亡くなった一人の老禅尼のことを想った。

黒田嘉。法名安徳院殿嘉祥妙慶禅尼。

禅尼が逝去されたのは九十歳だった。葬儀は栃木県大田原市の光真寺で行われた。

葬儀の儀記のしるす禅尼の略歴は以下の通りである。

●明治三十六年 長野県井上村(現須坂市井上)の安養寺にて前角朴翁・安意の長女として生まれ、後、須坂興国寺にて育つ

●大正九年 長野高等女学校(現長野西高等学校)卒

●大正十三年 女子美術学校(現女子美術大学)卒

●大正十四年 光真寺三十六世黒田白純と結婚

男子八名出産。以来光真寺復興発展に貢献

●昭和二十四年 栃木県西那須野町那須寺の開創に貢献

●昭和三十年 東京都品川区桐ヶ谷寺開創開基

●昭和三十九年 学校法人ひかり幼稚園創設

●昭和四十四年 横浜市港南区善光寺の開創に尽力

●昭和四十五年 米国ロスアンゼルス仏真寺開基

●昭和四十六年 米国仏真寺開単式参列・メキシコ等歴訪

●平成三年 静岡県小山町不二寺開基

●平成四年一月三十日 行年九十歳にて逝去

死の前年までいくつもの寺の開基に携わった禅尼の生涯は、余人の及び得ぬまことに有為なものだった。そして会葬者の誰もが心より逝去を悼む盛大な葬儀は、故人の人柄をよくあらわ

していた。

禅尼は草花が好きだった。地元にあじさい公園を作ったのは、昭和四十二年のことである。

だが、これは儀記にしるされた略歴記載事項からは漏れている。

公園を作り、たくさんのおじさいを植え、それを育て梅雨時の園内を清々しい青に染め上げるそのことは、寺の開創開基にくらべれば、禅尼にとって、いかにも何気ない無為の行為だったのかもしれない。人は逝き、公園には今年もおじさいが咲く。

へまさにしるべし。

空は一艸なり。

この空かならず華さく。

百艸に華さくがごとし。〳

禅尼の生涯にひとむらのおじさいの花を重ね合わせてみる時、この道元の言葉は胸を打つ。

禅尼は横浜の善光寺住職黒田武志老師の御母



堂である。黒田老師は私がしばしば親炙しんしやくの機会をいただく傑出した禪僧で、善光寺は四半世紀前に老師が無一物から興したものだ。

私はあじさいの傍で、穏やかに微笑む柔和な色白の老師の顔を思い浮かべた。

老師は仏教を通して、国際社会の安定と世界平和の実現を目指す法の実践家である。老師が理事長をつとめる善光寺海外留学僧派遣育英会の着実なすぐれた育英活動については、知る人も多い。ひとつの寺が私財をなげうって独自に運営するという、他に例を見ないこの育英会の交流は、すでに十四ヶ国に達する。宗派や国籍、男女の別を問わないその留学生の数は数十名をかぞえる。

留学生の中には、フランスやイギリスに赴く者がいる。スリランカの大学へ行く者がいる。アメリカの禪センターへ足を向ける者がいる。また反対に、日本の大学院で学ぼうとする韓国

からの留学僧がいる。内戦の続くカンボジアで孤軍奮闘する者がいる。

社会の未来に向けた展望のかなめは、いつの世にも教育と人材の育成である。私は世界平和を目指した人づくりにより一身の情熱を傾ける老師の洞察のちからに、心から敬服する。そして老師と親しく接するたびに、その炯眼けいがんを實踐しつづけようとする生涯の誓願にたいして、畏敬の念を深くする。

老師はかつてタイのワットパクナムで安居生活を送り、日本中を乞食こじき行脚して廻った人である。ひとつの育英活動を通して世界の未来を見据える老師の国際的視野は、虚飾を払ったその謹厳な修行の日々の培つちかったものだ。

私は目の前のあじさいの花を眺めながら、老師がかかえた生涯の誓願、その人生の拘泥を想った。

一人の有為の若者を育てることは、一本の草

を育てることだ。そしてそこに花を咲かせることだ。

へ空は一艸なり。

この空かならず華さく。

百艸に華さくがごとし。〴

空を一草と観ずる心は、老師にとって、その生涯の誓願と実践の成就にはかならない。

私はそんなことを考えながら、ふと老師が禪尼と重なり合うのをかんじた。そして我執を離れた老師ののっぴきならぬその人生の拘泥が、

私の内で、あじさい公園を作った禪尼の何気ない無心の行為とつながっていくのをかんじた。

老師は今後この現世という無辺の公園に、どれほど多くの人の草を植えつつけるのであろうか。そこにどれほど多くの花を咲かせるのであろうか。

私は禪尼と、生前ついで警咳に接する機会を持たなかった。私の知るその篤実な姿は、葬儀

で立てかけられた黒いリボンの巡る一枚の写真だけだった。

だが、私は目の前のあじさいの花によって、そしてまた老師の生涯の誓願とその精力的な活動によって、禪尼がゆくりなく自分の内で生きはじめののをかんじた。

故人はひとつの機縁によってよみがえり、その在りし日のいのちを、つと今に現出させる。死者は人を訪い、そこにいのちの灯をともしただ。

禪尼はどんな時にも黒衣のように目立たぬ、控え目な人だったという。人にたいしてつねに感謝を忘れぬ、やさしく慈悲深い人だったという。

あじさいの花は七色に変化するといわれる。そのぬけるようなみずみずしい色が茶ばみはじめる時、代わりに青いそらが顔を見せ、夏もま近い。

(日本芸術新聞・第83号より転載)